

10代の母親が生んだ1800グラムの赤ちゃん

第三者との相互関係の重要性を考える時に、黒人の10代の母親のほとんどが、性行為や出産の正しい知識、赤ちゃんの世話の仕方等を教えられなかっただけでなく、非難や侮蔑的な視線にさらされ、相手の男や親との二者関係、教師や友人の三者関係の支援もまったく受けていなかった事実を考慮する必要があります。

人の自律する力や自己意識の確立には、二者関係が大きく影響する研究はたくさんあります。例えば、子どもは母親に抱かれている時は、意外に、母親の顔よりも、第三者の顔を見る回数が多いのです。母親の存在がインターフェイス的な役割、すなわち、見知らぬ他者という恐ろしい存在と、愛着関係の強い母親という存在間の、複雑な関係を和らげる機能が働くのです。

また、家庭において、妻が夫の子どもの世話の仕方に肯定的な感情を持つことで、夫はより一層子どもに関わる回数が多くなり、また、夫も妻の子育てに肯定的な姿勢を示すことで、妻は自信を持って子どもを育てることも報告されています。

二者間における影響の研究が、三者間における影響の大切さを教えています。

さて、このような実験が行われました。

実験は、黒人の10代の母親が生んだ1800グラム以下の低体重児30人を二つのグループに分けます。

一つのグループは、一般の病院で行われている、低体重児が保育器の中で世話される方法で、看護師さんが保育器の中に手を入れてオムツを替え、ミルクを授乳します。

もう一つは、新生児が自分で体温調整が出来るようになれば、例え10分間でも外に出して、抱きかかえて揺さぶり、声をかける遊びを行います。

その結果に、グループ間の新生児の育ちに大きな違いが出ました。
後者の赤ちゃんたちは、前者に比べて極めて健康に育ちました。
実験はさらに続きます。

病院から退院後、後者のグループには専門の保育園の先生がこまめに家庭訪問して、
赤ちゃんの抱き方やあやし方、そして手を差し出す、寝返りをする、おもちゃを
つかむ、ハイハイで移動する、そして歩くまでを指導しました。

赤ちゃんがすくすくと育っただけでなく、子どもの変化以上に、著しい変わりようは
10代のママでした。一般に10代で子どもを産んだ女性の多くは、赤ちゃんを育てる
ことに無関心な母親が多いそうです。しかし、入院中から赤ちゃんの育てられ方
を見ていた10代のママ、さらに家庭に保育者が訪問して、具体的に赤ちゃんとの
関り方を教えられたことで、彼女は子どもを育てることに前向きになっただけでなく、
職場での仕事に対する熱意も出て、簡単に仕事を辞めることもなくなったそうです。

第三者との相互関係が、我々の行動や意思決定に大きな影響を与えていることを
教えてくれた実験です。